

# 『随聞記』成立を考える（序説）

## はじめに

『正法眼蔵随聞記』についての拙論はこれまで二度、<sup>(1)</sup>発表させていただいている。しかし、いずれも不完全さを免れきれておらず、更には自己の研究の中においては、新たな課題に遭遇すると同時に別の方向に論旨がやや展開していついていするため、随時整理して論究させていただくことにする。そのため、今回は一身上の都合で「序説」とし、「承前」は後日を期すつもりでいる。

今回、筆者が改めて論じたい問題の所在と研究結果の要旨は以下である。これまで拙論において筆者が一貫して主張してきたのは、『正法眼蔵随聞記』の義雲編集説であり、それは識語の作者における義雲（一二五三—一三三三）の可能性ということであつた。蓋し、この問題については多くの道元禪師研究者によって様々な考察が試みられてきている。そのた

橋 本 英 樹

め、一筋縄には行かない厄介な難題である。それでも筆者は敢えて時間をかけてもこの難問には注目していきたい。その理由は道元禪師の著述研究（主として『正法眼蔵』）において、『随聞記』の果たしてきた役割が想像以上に大きかったのではないかと、最近つくづく思うからである。換言すれば、『随聞記』の書誌学的成立史的研究は、初期曹洞宗教団史の思想的研究に深く内在してくるといふことである。これについてはいずれ稿を改めて論ずる。

## 一

そこでここでは、先ず筆者が今回、あるいは次回、別の論集において究明することになる内容のポイントを最初に少しく整理しておきたい。

### 《問題の所在と発表の要旨》

○奥書撰者になりえる条件（はたして義介・寂円・義演・瑩山は

成立しえるのか。）

一、仮名『正法眼蔵』編纂史に深く携わっていること。同時に『雲門室中ノ玄記』と『宝慶記』の内容に精通していること。

二、懷奘を先師と呼称し、懷奘が学地にあつた日のことをま  
で知っている以上、懷奘と親密な間柄であつたことが想定  
できる。

三、『随聞記』の内容が中国、日本の臨濟宗に對して好意的  
であることは、日本達磨宗系統の人の関与は薄く、編者と  
して相応しくない。

○なぜ、『随聞記』は『雲門室中ノ玄記』と『永平宝慶記』  
の如しであるのか。

○『正法眼蔵随聞記』命名の由来（仮説）

○『随聞記』と『義雲和尚語録』と六十巻本『正法眼蔵』と  
の類似性

▽『義雲和尚語録』の特質（鏡島先生による分類）<sup>(3)</sup>

一、宋朝禅の特質である機関が用いられている。

二、宏智正覚の禅風に親近していること。

三、臨濟宗に對して包容的な宗風であること。

▽六十巻本『正法眼蔵』の性格——七十五巻本『正法眼蔵』

との比較から（原田先生の論文参照）<sup>(4)</sup>

六十巻本は、最初が「現成公案」巻であり、最後が

「帰依三宝」巻であるので、在家化導を狙ひとした可能性も  
ある。また、七十五巻本と六十巻本を比較して明確になつた  
ことは、六十巻本に入っていないものに、他宗特に臨濟系の  
宗匠の批判をしている巻が多いこと、曹洞系の宗匠を称揚し  
たもの、曹洞の法系を明確にしたものが多く、そしてまた、  
出家学道の絶対性が幾分後退している観があること等が分か  
るのである。更に六十巻本にあつて七十五巻本にないもの  
は、皇室の崇仏、在家化導もしくは学道の指針となるものが  
加えられている。

## 二

○先師永平弊和尚、在<sub>ニ</sub>学地<sub>ニ</sub>一日、学道至要、随<sub>テ</sub>聞<sub>ニ</sub>記録<sub>ス</sub>、所  
以<sub>ニ</sub>謂<sub>ニ</sub>随聞<sub>ト</sub>。如<sub>ニ</sub>雲門室中玄記<sub>ト</sub>、如<sub>ニ</sub>永平宝慶記<sub>ト</sub>。今録<sub>ニ</sub>集<sub>シテ</sub>六  
冊<sub>ト</sub>、記<sub>シ</sub>卷<sub>ヲ</sub>、入<sub>ニ</sub>仮名正法眼蔵拾遺分内<sub>ト</sub>。六冊俱嘉禎年中記録  
也。

正法眼蔵随聞記 六 終

康曆二年五月初三日於宝慶寺浴主寮書焉

三州旛頭郡中島山 長円二世暉堂写也

寛永二十一年<sup>甲申</sup>八月吉日

『道元禪師全集』第七卷（春秋社）、正法眼蔵随聞記六、一五〇頁

先ず、ここでは『正法眼蔵随聞記』を編集し、更に「奥書撰者になりえる条件」<sup>5)</sup>をもとにこれまで数人の学者によって提示された祖師方の『随聞記』との接点を明確にしてみたい。はたして、義介（一二二九—一三〇九）、寂円（一二〇七—一二九九）、義演（？—一三二四）、瑩山（一二六八—一三二五）は『随聞記』成立に関説していたのであろうか。

和辻哲郎校訂『正法眼蔵随聞記』（昭和四年、岩波文庫）「凡例」で、江戸期の学僧として名高い面山瑞方（一六八三—一七六九）が、「然れども先師懷辨和尚とあれば、徹通和尚か、いづれ辨祖の法嗣ならん」と示されていることは周知の如くである。義介は一三歳の時、越前（福井県）波著寺で日本達磨宗の懷鑑にて就いて得度し、その後比叡山において具足戒を受けている。仁治二年（一二四一）春に深草興聖寺の道元を訪ね、爾来、道元門下として実参実究することになる。道元に初めて謁見した時に二二歳、懷鑑・義尹・義演・義準らに伴なわれての入門であった。懷辨とともに道元に師事すること多年に及び、禪師入越の際にも従って永平寺の典座・監寺等の要職を歴任した。道元示寂後は懷辨の法嗣となって永平寺の護持に努めた。正元元年（一二五九）に入宋し、弘長二年（一二六二）、四五歳で帰朝するまでの四年間、中国の五山等の

諸刹を遍歴した。帰朝後は永平寺の堂塔伽藍を一新し、規矩の整備に尽力したという。日分月分の諸清規、掛搭式、四節の礼儀などがそれである。また、義介は、中国諸山の堂宇を記録調査して将来したとされており、加賀大乘寺に現存し所蔵される『五山十刹圖』二巻がそれであると伝承されている。<sup>6)</sup>文永四年（一二六七）、師の懷辨をうけて永平寺三世に晋住した。しかし、やがて三代相論と称される内部紛争の結果、永平寺を追われ、晩年は大乘寺開山となって瑩山紹瑾などを輩出せしめた。波乱に富んだ生涯ではあったが、道元に興聖寺時代から隨身し、懷辨の高弟としての立場は他の追隨を許さない人物として容認せざるを得ない。

しかし、筆者は義介が『正法眼蔵』『永平広録』にその名が登場することなく、道元禪師の著述に深く関わった形跡が見当たらないことからして、義介と『随聞記』の関係はほぼ否定されるのではないかとみている。義介のかつての先師懷鑑は、当時の懷辨にとつては覚晏門下の同参であり、ともに道元禪師下にその身を寄せた達磨宗徒であった。しかし、その後の二人の運命は二分されていったという見方もできる。懷鑑は永平寺において首座としての地位につくこともあったが、『永平広録』巻三に見える覚晏のために請じた上堂には、道元禪師が、懷鑑を先師覚晏の弟子として、その孝順甚だ深いことは、特別の意味が潜むようであることが述べられている

る。懷井の立場とは遊離していたことが知られる。建長三年（一二五一）春、懷鑑は自らの命の行く末を案じ、達磨宗覚晏所伝の仏照徳光からの嗣書を義介に付与した。義介編録の『御遺言記録』は、義介がこれを血脈と見なしていたことになる。だが、道元はこれを嗣書と言っている。この嗣書が手渡された時、やがて義介から瑩山へと相伝されることになり、日本達磨宗に伝来した祖師相伝の血脈や六祖・普賢の舍利などの法宝もこの時、すでに伝えられていたことが想像される<sup>(7)</sup>。これは義介が懷鑑とともに終生日本達磨宗徒として、その法灯を潜在的に伝承していた事実である。このことは瑩山が能登（石川県）永光寺の奥頭に天童如浄の語録、永平道元の靈骨・孤雲懷井の血経・徹通義介の嗣書、自らの嗣書等の遺品を納めるまでの長期間、日本達磨宗の命脈として水面下で継承されていたことを如実に語るものである。この五老峰の建立によって瑩山自身は義介が引きつった達磨宗門下としての残滓を払拭したことになり、日本曹洞宗としての師資相承はここに一層明確化したことを知るものである。

田中敬信「『正法眼蔵随聞記』私考—その3—」（『印度学仏教学研究』二七卷一号・昭和五三年）では、『随聞記』巻末識語に注目するなどして寂円の存在を示唆している。田中氏は懷井と同時代の、いやそれ以前に道元とは天童如浄門下において同参であった寂円を重視している。田中氏は、「先師」と

懷井を呼びうる人で、この『随聞記』が懷井の「学地ニ在リシ日」であることを充分に知り、更に「雲門室中ノ玄記」も「永平ノ宝慶記」も知って、この『随聞記』のあり様を理解していること。更に『仮名正法眼蔵』の「拾遺分」に入れる事は当然と考えられ、『随聞記』が「嘉禎年中ノ記録」である事を「学地ニ在リシ日」共に過され、特に「ハツベクンバ明眼ノ人ヲハツベシ」が、この『随聞記』の頭初、巻一一にあるべき事を充分、知っていたと思われることなどを勘案した。そこで義介は懷井の法嗣で永平寺三世となった高弟ではあるが、道元禅師会下に参学したのは、仁治二年（一二三四）春とされている。『随聞記』巻五の「嘉禎二年臘月除夜」の一文末尾にある「是レ興聖最初の乗払ナリ、井公三十九ノ年ナリ」という『随聞記』本文への加筆、あるいは指摘のできる資格者として、この興聖寺初の首座の乗払を眼前で経験し、弘安三年（一二八〇）、懷井示寂以後、当時の懷井の年齢をそのまま指摘できる人は、その場に居合わせた人であろうと想像し、推論上、『随聞記』編者の影の人として宝慶寺寂円禅師をあげてみたとされているのである。

田中氏は寂円と懷井の時代性の近似と共通体験を意識されたの見解と思われるが、今のところ『随聞記』成立年代が確定できていない以上、この説は効力を発揮するには資料的に実証が難しいと思われる。特に寂円の場合は道元禅師の著

述、特に『正法眼蔵』『永平広録』との関連性を全く見出すことができず、『随聞記』の内容において栄西を初めとする日本人の頻出が目立つことからして編者にはなりにくいといえるであろう。

東隆真『正法眼蔵随聞記に聞く』（昭和六〇年、教育新潮社）は、「このうち、このごろ、一、二の学者は、宝慶寺を開いた、中国人の僧、寂円禪師（一二九九没）ではないかと言っている。ここでは、くわしいことはすべて省略するが、私は、この見解はいただけない。あえて言えば、瑩山禪師とのかかわりを、もっと重視すべきである（拙著『五写本影印・正法眼蔵随聞記』を参照）」と記している。ここで東博士の説に従って瑩山と『随聞記』との関連を示すものと思われる点をまとめておきたい。瑩山は弘安三年（一二八〇）春、一三歳のとき、義介を介して懷辨最後の弟子となっている。その年の八月二四日、懷辨は八三歳の高齡をもって遷化したが、懷辨最晩年の約半年間、瑩山は師事することができた。のちに瑩山は、懷辨を「先師辨和尚」（『洞谷記』）、「永平辨和尚」（『伝光録』）と記している。また、瑩山の『伝光録』や『洞谷瑩山和尚之法語 示妙浄禪師』には、随処に『随聞記』の本文が頻繁に引用されているという。これは瑩山が『随聞記』を熟読していたとされる一つの証しであろうとする。「雲門室中ノ玄記』について『伝光録』第二九祖章に『室中玄機二云』

とあり、達磨と慧可との故事が掲げている。『伝光録』の「室中玄機」が『随聞記』の「雲門室中ノ玄記」と同じものであるかは今だ判明していない。しかし、「室中玄機二云」うところの達磨と慧可の故事は、直接的には『雲門匡真禪師広録』には辿りつかないとしても宗門中世において「雲門室中ノ玄記」そして「室中玄機」という語は『随聞記』と『伝光録』のみに限って見出される要語であるとされる。

また、「永平ノ宝慶記」とのことと言及すれば、瑩山は如浄を「高祖」と尊崇し、『宝慶記』を重要視している。それはその著述からも充分、知ることができるとしている。東博士は『伝光録』は、釈尊と摩訶迦葉の拈華瞬目破顔微笑の因縁について多子塔前説に立つとしている。それは道元の靈山会上説に依らないで、あるいは『宝慶記』にある如浄の「世尊、最初に迦葉の来りて帰依するを見て、即ち、仏法並びに金欄袈裟を摩訶迦葉に附嘱するを以って、第一祖と為すや」（原漢文）という、これは場合によっては多子塔前説に起因しているものではないかとされているのである。筆者はこの点については必ずしも賛同的ではないものの、『伝光録』の中の「室中玄機」の語が指摘されていることは何らかの因果關係をもつものとして東博士の論究に強い関心を持たざるを得ない。但し、筆者は瑩山の手許に『随聞記』が届いた時にはすでに完全な形態として『随聞記』が成立していたことが想

像できるので、場合によっては『伝光録』中「室中玄機」は『随聞記』識語の「雲門室中ノ玄記」に導かれたものにすぎないと考え合わせれば、さほどそれ自体に深い意味はないようにも思われるのだが。

瑩山以外の門下と『随聞記』との関連を示す資料的根拠の欠如、瑩山自らが『随聞記』を所持していたことを示す客観的史実性がいまだないこと、瑩山住職地の加賀大乘寺、能登永光寺、総持寺などに『随聞記』伝承を説くものがなく、新出資料を俟たないとならないことは今のところ有力説にはなりにくいと思われる。そもそも瑩山が『随聞記』成立に関わってくるには筆者は少し時代が遅すぎていると思っっている。それは筆者が条件としてあげている『正法眼蔵』編纂史に関与している事実がなく、懷井との親密さについて言ってもあまりに年齢が掛け離れていて信憑性が薄弱であることは免れきれない。

池田魯参『現代語訳正法眼蔵随聞記』(一九九三年、大蔵出版)四二三頁、「註記」において、「私は、十二巻本『正法眼蔵』の書写を分担した義演(？—一三二四)の可能性もあると考えられている」と記している。義演についてその行実を知ることには甚だ難しいようである。出生、生国、俗系・俗姓いづれも不明である。一応言えることは、波著寺懷鑑に受業し、仁治二年(一二四一)に懷鑑・義介らと深草興聖寺の道元門下に投じ

たことである。道元滅後、懷井に師事し、法兄義介の後住として永平寺第四世となっている。義演については、懷井の付法の弟子であるのかどうか大問題であり、『三祖行業記』『三大尊行状記』『建撕記』および広福寺文書の中の「秀香和尚譲状」の記載は伝戒の弟子を踏襲している。無論、未嗣法者が永平寺の世代を継承できたのかは詳らかでないという。

ところで、義演は仁治二年(一二四一)春の達磨宗挙げての興聖寺入り後、終生道元の膝下から離れることなく、興聖寺から永平寺へと参随し、侍者・書記として手腕を発揮した。義演の事蹟として代表されることに『永平広録』の編集があり、巻五、六、七を担当した。これは建長元年(一二四八)八月末より、建長四年末頃までの上堂の記録であり、義演は道元の最晩年に侍者位にあつて仕え、上堂説法の整理等に従事していたことと思われる。更に注目されることは、義演は、懷井の『正法眼蔵』蒐集書写作業等に関与していることである。それは『新草十二巻本正法眼蔵』書写整理において、義演はこの作業に、書記として参じ、第十二「八大人覺」第三「袈裟功德」の二巻を書写していることである。この義演が『随聞記』と無関係とする論証は今のところやや困難のようである。強いて言えば、日本達磨宗系統の人であったことと、『宝慶記』の存在を知っていたかどうかの可能性が他の人よりはやや低いことくらいかもしれない。あとは『随聞記』

の内容が『永平広録』巻五ノ七、『新草十二卷正法眼蔵』とどの程度、類似性が確かめられるかであろう。後日の課題としてみたい。

ところで、文献上知りえる懷辨の弟子とはいかなる人物がいたのであるか、『三祖行業記』『三大尊行状記』『建擲記』および広福寺文書中の「秀香和尚讓状」の記載をもとにまとめておきたい。<sup>10</sup>一致した記載を示す『三祖行業記』『三大尊行状記』は懷辨の付法弟子（『建擲記』は「法嗣」とある）として、義介、義尹（一三〇〇?）、義準（生没年不詳）、仏僧（生没年不詳）、寂円（二二〇七—二九九）の五人をあげている。三書ともに伝戒弟子としては義演、道荐（生没年不詳）の二師を示している。また、「秀香和尚讓状」については些か異なる記述がみられる。伝法伝戒として義介、義尹・戒法として仏僧、寂円、義演、更に慧鑒という人物を記している。更に『洞谷記』『伝光録』においては、瑩山が最後の弟子となっていることが知られる。従来、懷辨を「先師」と呼称するからにはその法嗣とされる可能性は極めて高いだろうとされてきた。それは特に面山の指摘する、徹通義介説に基づく伝統的解釈であった。しかし、近年は必ずしも「先師」の呼称は法嗣に限られるものではない<sup>11</sup>ということが通説になっているため東博士の瑩山説も大きく浮上しているのである。東博士が瑩山と『随聞記』と結びつける理由づけも一定の論拠を示している

点で重視すべきであると思われる。

だが、筆者は博士のいわれる「今日、その行状が比較的に追跡の可能な祖師は、義介・瑩山紹瑾禪師が第一であり、義尹、寂円がこれに次ぎ、その他は、ほとんど知る術を絶たれているのである」とする見解には幾分か疑問を呈したい。筆者は懷辨の弟子に固執することよりも、むしろ、『随聞記』識語を含めたその内容や、史料性格を根拠にしていくべきであると思っている。

そうした観点から言えば、かつての今枝愛真博士による『随聞記』が、鎌倉時代末から南北朝中期に、道元の著述や伝記をもとに、永平寺、宝慶寺僧団による寂円・義演の門下が道元思想を新たに解説したものであるとして成立したのではないかとする推論は拡大解釈とはいえ、一考を要する重大な問いを投げかけたものとして捉えなおしたい。今枝説として提示されたものは、只管打坐や公案否定の『随聞記』の説示と『正法眼蔵』に喰い違いが存すること。大慧宗杲の是非をめぐる『正法眼蔵』と『随聞記』の記述の不自然さ。鎌倉下向の史実と『随聞記』で説くところの矛盾がそれぞれ指摘された。これは表面的には一概に決定づけられるものではないが、『随聞記』書誌学的思想的研究史上、軽視できない特筆事例であって、『随聞記』研究を見なおす契機として見るべきものではなからうか。もっともこの今枝説はのちに伊藤秀憲

氏の詳細な論証によって反論をされて、ここしばらく進展がないことも事実である。伊藤氏の反論に説得力があることもこれまた事実であるが、筆者はこうした諸問題の影には『随聞記』に秘められた編集上の何かしら意図があったものと見ている。

大久保道舟博士は『道元禅師全集』(春秋社、昭和五年)発行当時はその「解題」において『随聞記』の史料的性格について、懷井滅後に、おそらく懷井の筆録した道元の説示の断簡を、その直弟子あたりが一々蒐集するに及んで形式的に成立したもので、「侍者懷井編」(長円寺本)の記載は、その懷井の功績に因んだものと解した。そして、叙述の形式や用語の特徴などを考察して、だいたい懷井の直弟子達が道元の自筆草稿、懷井筆録の法語等を吟味整理して一つの新たな完本とし、それは恐らく鎌倉末期頃であつたらうと推定している。今枝説はこの大久保説に示唆されたものと思われる。但し、その後、大久保博士は「嘉禎年中記録」とあるものを興聖寺から永平寺時代まで及ぶ道元の垂示記録としていたものは、長円寺本の書誌学的認知によって自ら改められた<sup>(12)</sup>。

ここで大久保説・今枝説を紹介しておいたことは、後の展開に深く関わってくることなのである。

差し当たり、『随聞記』編者としてその奥書選者に、はたして義介、寂円・義演・瑩山はなりえるのか類推してみたわ

けではあるが、これまで筆者が、一貫して義雲説を主張してきた理由を序々に整理してみたい。まず最初にこの冒頭で記した編者の諸条件においてそれを充たしえる唯一の人物であることを確めていきたい。

道元がその一生涯にわたって書き続けられた仮名法語である『正法眼蔵』には幾つかの編集本が存する。そのうち六〇巻本『正法眼蔵』は義雲によって編集されたものということが定説になっている<sup>(13)</sup>。更に嘉暦四年(一三一九)、義雲七七歳の時に、六〇巻本『正法眼蔵』をベースにして各巻題目下に著語を付し、その大意を七言四句の偈でもって頒出している。これがいわゆるの、『永平正法眼蔵品目頌並序』である。永久岳水博士は、義雲の『品目頌』はそれぞれの巻の宗意を端的に解示しており、これは正法眼蔵編輯史上、重大な典籍と評している。博士によれば、これは経豪の『正法眼蔵抄』よりも後の著述でありながら、宗門に伝来していた形跡としては、『正法眼蔵抄』より早く、広範囲を占めていたとされるのである<sup>(14)</sup>。

『雲門室中ノ玄記』『永平ノ宝慶記』について言えば、義雲が『雲門室中ノ玄記』を知っていたかどうかは今のところ確認できないが、『宝慶記』については確固たる証拠がある。

『宝慶記』は、周知の通り、如浄の説示を道元が筆録してその断簡を、懷井が書写して卷子本としたものである。これが



やがて宝慶寺の寂円に伝わり、寂円示寂の二カ月後、その法嗣の義雲の拝覧するところとなったのである。これらのいきさつについては『宝慶記』奥書をしたためた懷辨と義雲の語に詳しい。これはいかに義雲が『宝慶記』に精通していたかを語るものであると同時に、末尾の懷辨の記載と併記される義雲の立場を思うと、単なる懷辨との関わりではなかったと予想せしめるものがあるのである。興味深いことは、義雲の『正法眼蔵』書写は、弘安二年（一二七九）越前中浜の新善光寺にはじまるとされるが、これは義雲が寂円門下に投入してまだそれほど日の浅い時期で、すでに懷辨と義雲は親しい関係にあったのではないかということが知られていることである。

ここで義雲を語る場合、非常に難しいことは、はたして義雲が日本達磨宗系統の人であったのかどうかということである。義雲の日本達磨宗出身説を仄めかす学者もおられるが現段階で知りえる文献においては、それを結論づける証拠には至っていない。今のところ宗門の伝統的学説上においては義雲を達磨宗出身として扱った事例はないようである。

義雲の伝記については、石川力山「永平寺五世中興義雲禅師伝（十四回）」（『傘松』昭和五七年一月／昭和五八年三月）が最も詳細で精緻な論であるため、これを参考にして少しくまとめておきたい。まず、伝記の基礎史料として、『宝慶由緒記』

（建綱撰）、『建擲記』（建擲撰）『義雲和尚語録』（侍者円宗、空寂編集）『日域洞上諸祖伝』巻上「宝慶寺義雲禅師伝」（湛元自澄撰）『延宝伝灯録』巻七所収義雲禅師伝（正元師撰）『本朝高僧伝』巻二十五「越前永平寺義雲伝」（正元師撰）『義雲和尚略伝』（龍堂即門撰）『日本洞上聯灯録』巻二所収義雲禅師伝（嶺南秀如心撰）などがある。これはすべて建長五年（一二五三）臘月に、洛陽縉紳の家に出生とし、父母や俗姓等については全く不明であるという。奇しくも、道元入滅の京都に、その年誕生していることは事実らしい。義雲の道元再誕生説の所以である。その他、『本朝高僧伝』は一三歳、寂円について出家し、二〇歳頃から諸国を遍歴したと記するものの『宝慶由緒記』には、義雲の一三歳であった文永元年（一二六四）頃には、まだ真空沙弥寄進によって宝慶寺は開創まもなく諸堂は整っていないかったというのである。この『本朝高僧伝』の記載も再吟味が必要そうである。また、『義雲和尚略伝』（龍堂即門撰）は、八一歳遷化、法臘六五歳としているので、一応、義雲は一七歳の時に出家したことになる。義雲の寂円入門は二四歳時としてほとんどの諸伝が一致している。（但し、『建擲記』は二五歳出家説をとっている。）これらの伝承に従えば、とりあえず義雲と日本達磨宗との接点は今のところ見出せない。もし、仮りに寂円参学以前に義雲が達磨宗と何かしら関わっていたとしても、その後の寂円への傾倒ぶりからすれば、少

くとも義雲に関しては達磨宗の禅風を引きつったとはとても考えにくいし、それを『義雲和尚語録』の内容からもある程度、推測するに難くない。(つづく)

註

(1) 拙論「正法眼蔵随聞記」の一視点(『宗学研究』第三十八号・一九九六年三月)及び『正法眼蔵随聞記』とその周辺(駒沢大学大学院『仏教学研究会年報』第二十九号・一九九六年五月)

(2) ここでの日本の臨濟宗というのは、具体的には栄西禅師を指す。道元禅師の宗風の特質を簡潔に言えば、それは正伝の仏法と祇管打坐の坐禅にある。それは同時に天童如浄の属する中国曹洞宗との訣別であり、禅師自身の日本的展開を意味する。それ故に自らの立場を一貫して曹洞宗、あるいは禅宗と呼称することなく生涯を閉じた。必ずしも宋朝禅を継承しない道示独自の宗風、いわゆるの正伝の仏法とは、禅宗五家七宗の一派としての曹洞宗から離脱を自ら標榜したところに特異性がある。

それに対して栄西は入宋後、臨濟宗黄竜派の祖師禅を嗣いで五家を意識的に相承してことで知られる。栄西は叡山の伝教大師が伝来した禅が絶えてしまっていることを嘆き、禅の復興は叡山仏教の再興であると立論して、あの著名な『興禅護国論』の撰述を建久九年(二一九八)、栄西五八歳のときに行なっている。これによって禅門の必要性を啓蒙し、禅宗の宗派を容認して、やがて日本臨濟宗の宗派的展開の宣言

をすることになる。これは道元とは対照的な立場といえる。しかし、一方で栄西は日本達磨宗に対しては徹底して批難しその存在には難色を示した。

(3) 鏡島元隆「宗学思想上における義雲禅師の位置」(『義雲禅師研究』昭和五九年・大本山永平寺祖山傘松会)

(4) 原田弘道「初期曹洞宗と義雲の立場」(『宗学研究』第一五号、昭和四八年)

(5) 筆者の考察によって試案した独自の奥書撰者になりえる条件である点はご了解いただきたい。あくまでも試論ではある。

(6) 『永平寺史』上巻(昭和五七年九月)二四一〜二四二頁参照。

(7) 前掲書、二三五〜二三六頁参照。

(8) 東隆真『五写本影印・正法眼蔵随聞記』(昭和五四年、圭文社)二〇二〜二〇三頁参照。

(9) 『永平寺史』上巻(昭和五七年九月)二五八〜二五九頁参照。

(9) 前掲書参照。

(10) 前掲書、二五九頁。及び、東隆真前掲書の二〇〇頁参照。

(11) 中世古禅道『道元禅師伝研究』(国書刊行会、昭和五四年一月、一五七頁)によれば、「先師」とは「本師」に限られるものでなく、随従の師の呼称にも用いられるとされている。

(12) 大久保道舟校註『新校註解正法眼蔵随聞記全』(山喜房仏書林 昭和一七年)「解題」参照。

(13) 六〇巻本『正法眼蔵』の義雲編集説を近年、河村孝道博士

は否定しておられる。博士は六〇巻本を懷慧の謄写蒐集の事実と考証しつつ、結論的には試論として六〇巻本を道元親輯時期にまで遡るであろうとするのである。(河村孝道「義雲禅師と『正法眼蔵』 鑽仰——六十巻本の編集・成立の問題との関連において——」(『義雲禅師研究』昭和五九年、大本山永平寺祖山傘松会)に詳しい。但し、なぜ義雲が道元の最終稿本としての七十五巻本に依ることなく、草案本・未定稿本としての六十巻本を重んじ、『品目頌』を成したのであるのかということである。鏡島元隆博士は、これについておそらく義雲の心情には、師の寂円の禅風を学んで体得した臨済宗に対する寛容さがあったからではなかったかと推論しておられる。(鏡島元隆「宗学思想上における義雲禅師の位置『義雲禅師研究』」。筆者はこうした一連の研究を参考にしつつ、今後その是非を問いたいと考えている。

(14) 永久岳水「永平正法眼蔵品目頌について」(『傘松』昭和三年)参照。

(15) 義雲と越前中浜新善光寺との関係は、石川力山「永平寺五世中興義雲禅師伝(十一)」(『傘松』昭和五七年一月)に詳しい。石川氏によれば、義雲と『正法眼蔵』との関わりは懷慧抜きには考えにくいとする。懷慧、寛海・義雲らによる建治元年、同三年、弘安二年に書写された十七巻本中、新草十二巻に含まれる「供養諸仏」や「帰依仏法僧宝」もあるものの、それら一七巻はすべて、六十巻本『正法眼蔵』に編入されている。これは、建治、弘安年間に行なった『正法眼蔵』の書写と六十巻本『正法眼蔵』との間に何か密接な関係がある

『随聞記』成立を考える序説(橋本)

るのではないかと示唆されている。但し、新善光寺に関する諸問題については今のところ結論的なことが見出せないのが実情のようである。

(16) 鏡島元隆、前掲書一六頁参照。

(17) 『永平寺史』上巻(昭和五七年)三〇四頁参照。

〔付記〕

過日の平成八年度第一回仏教学会(六月三日(月))の発表の際、筆者に口頭上誤解の生じていたことをここにお詫びいたし、訂正させていただきます。それは伊藤秀憲教授からのご質問で、筆者が発表当時、『宝慶記』が中浜の新善光寺から発見されたものと勘違いをしていたことであります。これは、筆者による『義雲禅師研究』(大本山永平寺祖山傘松会)所収、昭和五十九年、河村孝道「義雲禅師と『正法眼蔵』 鑽仰——六十巻本の編集・成立の問題との関連において——」からの全くの誤読であったことをこの場を借りて深く反省いたします。同時に河村孝道先生、伊藤秀憲先生にはご迷惑をおかけいたしましたこと、ここに記してお詫び申し上げます。